
空色ファンファーレ

testrip

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空色ファンファーレ

【コード】

N6062C

【作者名】

testrip

【あらすじ】

時を刻むと共に変わる空に、少しの嘆きを言う少女たち。深い意味の無い一場面。

深く、深く息を吸い込んだ。

青色が体の芯まで入ってきそう、少しわくわくした。上を見上げれば空色快晴。

私の鼓動は躍り高ぶる。

「愛ー、何してんの？」

遠くから聞こえる声に振り向くと、そこには幼馴染のあーちゃん。私は緑の草の上を走って飛びついた。

「あーちゃん！」

抱きつくと幼馴染はよろめいて、温かな芝生にこけた。もちろん、私もろとも。

痛いとかく幼馴染を完璧に無視して私は彼女の隣で仰向けになった。

「きれーだよ、空。」

独り言のように呟くと、隣の彼女は小さく「うん。」と呟いた。その声が大きな空に吸い込まれていった。

隣の彼女は空よりも綺麗に輝いて、緑の匂いは何故か新鮮に感じられた。

「明日から新学期だね、あーちゃん。」

顔を見たまま言つと、あーちゃんは複雑な表情で微笑んだ。
ああ、そういえば私は今年いっぱいの命なんだっけ。
そんなこと忘れていた。

あーちゃんは一度、ふっと笑つた。

「愛は気楽だねえ。」なんておばあちゃんみたたくあーちゃんは話した。

「あーちゃんはおばあちゃんみたいー。」

「うっさいよー。」

間延びした声が、やっぱり綺麗で私は泣きそうになった。

聞けなくなるのかな、もうすぐ。そんなこと考えたくもないから、私は笑うんだ。

ずっと、あーちゃんの隣で過ごしたいと願う事も出来ない。

空色ファンファーレ

この一瞬の風景を思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6062c/>

空色ファンファーレ

2010年10月11日02時05分発行